所属：明石工業高等専門学校　教養学群

研究タイトル：国際関係における南シナ海問題の研究
中小国の対外行動の特徴や影響の研究

氏名：	黒杭　良美　／KUROKUI Yoshimi	E-mail：	y.kurokui@akashi.ac.jp
職名：	助教	学位：	博士（政治学）
所属学会・協会：	国際政治学会，国際安全保障学会，アジア政経学会		

キーワード：	南シナ海問題，中小国，東南アジア，国際関係
技術相談 提供可能技術：	・南シナ海問題をめぐる関係国の行動や評価・認識 ・南シナ海問題が国際秩序や国家の行動に与える影響 ・中小国とはなにか、その対外行動の特徴や影響（影響力）

研究内容：南シナ海問題をめぐり、何が変化しているのか？

南シナ海問題は、現在進行形の領土紛争・国際問題であると同時に、大国が影響力をめぐって競争し、中小国が生存と繁栄を必死に目指す場となっている。

南シナ海問題のように、国際秩序や大国の動向に大きな影響を与えうる問題をめぐっては、「いつ」「何が」「なぜ」「どのように」変化したのか、あるいは変化するのかを検証することがしばしば求められる。そのようななか、既存の研究の多くは、南シナ海問題をめぐる国家や組織（以下、各アクター）の行動の変化を分析してきた。しかし、行動の変化だけでは、「なぜ中国や ASEAN 諸国は、あのような行動をとった／とらなかったのだろう」「アメリカの行動は期待外れ／予想以上だ」といったような政治家や関係者間の評価の違いを説明できない。そこで、この課題を克服するために着目するのが、これまで必ずしも変化すると考えられてこなかった「南シナ海問題そのもの」の変化である。

南シナ海問題は、本来の領有権紛争としての性格（1990 年代～）から、関係するアクターが影響力を維持・拡大するために使う対象となり（2000 年代～）、次第に秩序への挑戦を象徴する問題（2010 年代～）へとその性格を変化させてきている。

そして重要な点が、このような「南シナ海問題」の変化がいつ起きたのか、各アクターによってその時期（タイミング）が異なっていることである。つまり、見ている問題は同じであるにもかかわらず、それに対する評価や位置づけが各アクターによって異なる時期が存在するのである。

このような南シナ海問題をめぐる評価や位置づけのちがい、つまり認識のズレこそが、同問題をめぐる各アクターの対応のズレや不和を生じさせる重要な要因となっている。上述した「なぜ中国や ASEAN 諸国は、あのような行動をとった／とらなかったのだろう」「アメリカの行動は期待外れ／予想以上だ」といった評価のちがいはもちろんのこと、ある行動により「期待していた効果と異なる結果をもたらしてしまった／もたらすことができた」のは、このような認識のズレが影響していると考えられる。

今後の目標は、南シナ海問題を事例として、国際関係理論に還元できるような研究を進めることである。特に、東南アジア地域の中小国の対外行動に対する分析を通して、国家の対外行動に関する理論の再考を促すような研究を目指している。

提供可能な設備・機器： 特になし

名称・型番（メーカー）	